

SAO裏企画に選ばれた少女達

「あなたの顔なんて、二度と見たくないわ……」

「私は貴方達の言いなりになんてならない」

心と身体を操られ

「……あなた……すみません、取柄は……お話を……お聞き……」

植え付けられる強制絶頂

「……あなた……お話を……お聞き……」

「……あなた……お話を……お聞き……」

無垢なカラダは快樂漬けにどっぷりハマリ

「……あなた……お話を……お聞き……」

大切な仲間達が

「……あなた……お話を……お聞き……」

音声付きサウンドノベル

肉棒中毒へと堕ちて行く…

Minority hearts7

～催眠寝取られ～

CG基本33枚

Hシーン26本

「君の名前は？」

「……………シリカ……です」

「本名は？」

「……………綾野……珪……子……です」

虚ろな瞳の少女が、男の言葉に従順な答えを返す。

「SAOはごつやつて始めたんだい？」

「……………ナーヴ……ザア……お父さん……に……」

「買って……もらいました……」

「なるほど。それじゃあ、」

「大好きなお父さんには申し訳ないけど、スカートをめくってみようか」

「常識的な感覚を持つ女の子ならば、嫌悪を抱くような、ありえない命令。」

しかし——

「……………はい」

部屋に集まった男達が目を見張る中、少女はゆつくりと、

しかし躊躇いもなく、自らのスカートをまくり上げる。

微かな衣擦れの音を響かせ、

スカートに隠されていた白い布地が薄暗い照明の中に浮かび上がった。

スス…



「何といけない子だ……これは罰を与えなくてははいけませんな」

ペンダントを握る男が、集まった客人達に形式ばかりの同意を求める。息を呑む気配が周囲の男達の間を広かった。

「罰として装備を解除しなさい。良いね？」

「……………はい」

少女は頷き、胸のプレートに手をかけた。そのまま装甲の留め金を外し、紅の衣装さえもゆるゆると脱いで行く。

これもこのサービスなのだろう。

SAOに限らずゲーム全般としてボタン一つで着脱が可能と聞いているが、今この場においては、より現実的なストリップが可能であるらしい。

脱ぎ捨てられた外套が柔らかい衣擦れの音を室内に響かせる。

そして男達の前に、下着だけを残した少女のしなやかな身体が現れた。

「そついえばシリカちゃんは経験値が欲しいんだっただね？」
未だ虚ろに佇む少女に、騎士服の中年男が尋ねる。
もちろん返答を期待してのことではないだろう。

「……………経……………験……………値……………」

「そつ、経験値だ。」

早く強くなって、キリト君の隣に立ちたいだろう？」

「……………はい……………」

「シリカちゃんのためにお友達がたくさん来てくれたから、
彼らから好きなように、”経験値”をもらおうと良い」

「……………はい……………」

まどろみながら頷くその耳に、男がいくつかの言葉を囁く。

「それじゃあ……………好きな人のためにいっぱいレベリングしてみようか……………」
再び掲げられたペンダントから眩い光が発せられ————



「ん……ちゅ……はあ……あ……ん……っ……くちゅ……」

「……は……ん……ちゅ……あは……ふ……んちゅ……」

「んぶ……ん……は……あ……」

「精液……んちゅ……はあ……精液……ください……」

ペロ♡

ペロ♡
ペロ♡

ニギ♡

「……ふふ……そんなに私の精液が飲みたいかね？」

「……はい……んぶ……ちゅ……」

「欲しい……です……はあ……精液……ください……」

「全くもう、「これじゃどの程度の戦力か」

「わからないじゃないですか。」

「最初からフル勃起させておいてください！」

苛立ち紛れに竿を握り締めると、

団員の口から苦しみとも恍惚ともいえないうめき声が漏れた。

「急いでるのに……」

「これじゃ今日中に終わらないじゃないですか！」

「ん……」

「これではいつまで経っても確認が終わりません」

「逃げないでください。」

キョ

ブルン

ブルン
ズレ
ズレ

「ア、アスナ様、それは……」

「んあ……ちゅ……？ はあ……見ればわかる……れしよ……んう……」

「おちんぼ、が……あ……最後まりえちゃん……」

「んう……硬くにやる……よつにい……んちゅ……あむ……」

「うお……っ」

「んぶ……うごかりやいで……えろ……くらみやい……はあ……」

「ほりや……早く……んちゅ……おちんぼしよーロシユキリユ……」

「えろお……出してみれ、くらみやい……」

「ハ……」

「……ア、アスナ様……それ以上は……」

「ひよんなんで……フリョアボスト……じゆるう……」

「たひゃかえまひゅかっ……っあむっ」

ブルン

キョ

へっ
へっ
へっ

ス





「んう……じゆる……はあ……んう……んぐ……」

はあ……ペろ……んく……っけほ……

やれば……出来るじゃないですか……

「ア、アスナ様………」

ドロー

ソードスキル発動後で神経がまだ敏感になっているのだから。
うろたえる団員の腰に手を回し、無理やり引き寄せる。

ブル
ズ

ハ……♡

ハハハ

キ

ブルン

「んむ……らって……じゆる……まら、んあに……はあ……」

「おちんぼそーりよ……れろ……おっキー……」

「ほら、次の人、早くズボン脱いでおちんぽを出してください。
次の次の人もあらかじめチンポ出して待ってなさい」

いつの間にか列を作っていた部下に、副団長としての威厳をもって命じる。

「え……らと、本当にその……これ、突っ込んでも良いんですか？」

トビ

「良いに決まってるじゃないですか。早くしてください」

キリー

ブル
ス

ブルン

ビュッ
ビュッ

ハハ
ハハ

キョ

「んふ……えろ……はあ……ちゅっ……あは……えろお……」

トロ



「最強ギルドの幹部さんが、

護衛も付けずにこんな時間に二人で歩いて大丈夫なのか？」

「はは、あれはアスナ君が特別なだけなんだよ。

私のような冴えないおっさんは、

妬みを買えるほどの人気さえないから何も問題はないのさ」

モッ

向かいに座る黒衣の少年の問いに、

少女の隣に座る中年の男が笑いながら禿げ上がったおでこを叩いてみせた。

「私よりも君達こそこんなもの宿で食事なんかして大丈夫なのかい？

攻略組のトッププレイヤーとポリウムゾーンのアイドルが

夜のレストランでデートだなんて、明日の新聞が賑やかになるね」

血盟騎士団攻略副担当の男に視線を振られ、

シリカはあわてて背筋を伸ばす。

ニコッ

「……って、別にデートといつわけでは……」

「っ……あ……はあ……」

熱にうなされたような艶かしい吐息が、少女の桜色の唇から漏れた。

「ん……あ……はあ……ん……」

モッ♡

あ♡

あ♡

はあ♡

はあ♡

小さな身体を蝕む、官能的な甘い毒。

少女の異変に気付かないのか、同じテーブルでは、

既知の仲であるプレイヤー二人の何気ない談笑を続けている。



「まさかシリカを血盟騎士団に勧誘しようってんじゃないだろうな」

グッ

「……え？……あ……私が、何か……？」

キュン
キュン

ツツ

「シリカちゃんが血盟騎士団に入ってくれたら、

うちの男達も頑張ってくれるんじゃないかなって話をしてたんだよ」

モ

ニコッ

「えあち……わたしは……別に、血盟騎士団に

入りたいというわけでは……その……ないです……」

ハッ





グハッ♡

グハッ♡

「はぁ……はぁ……あ……はぁ」

「……ん……っ」

「……ん……っ」

ジワ…♡

キュン♡
キュン♡

「あざっやだ……こんなところだ」

「はぁ……ん……あ……」

ローターに煽られた乳首から生まれる情欲を逃がすかのように、
熱い吐息を吐き出す。

「はぁ……はぁ……あ……ん」

「はぁ……はぁ……あ……ん」

許容外の快樂電流が暴走し、神経とその四肢を痙攣させる。
 染みどころでは済まされなほほどに溢れた愛液は椅子を濡れ落ち、
 この世界には存在しない排泄行為のように
 レストランの床に水たまりを作っていた。



はぁ... はぁ... はぁ...
 ハー...
 ビク...
 ビク...

ググググググ

トロ...
 ゴクゴクゴク...

ゴクゴクゴク...

はぁ... はぁ... はぁ...
 は... あっ...
 あはぁ... あっ... あっ... あっ... あっ... あっ...
 あはぁ... あっ... あっ... あっ... あっ... あっ...

ポン...
 ガガガガ...

ん...
 キニ...
 キニ...
 ポタポタ...

「シリカくんは現実世界でも自慰を嗜んでいたのかね？」

「そんなこと……**おじ**あ……クラスの子から……はあ……**「こ」**……

触ると……気持ちいいって教えてもらっ……て……あん……
少しだけ……ですよお……」

「ほっほ、そんなに股を揺らして……
シリカくんは我々を誘っているのかね？」

「だって……あん……おまんこ、見えた方が……
おいさんたちも……オナニー、しやすいですよね？
パーティープレイは……助け合いが、基本……なんですよお……」



「えへへ…経験値…こんなに…いっぱい…」

「はあ…嬉しいですう」

「でもまだ…イけますよね…もっともっと…」

「はあ…経験値…んふ…もらっちゃいますよお」

「もちろん、引き受けたからには最後まで付き合おうではないか」

「シリカくんは心行くまで、レベリングに励みたまえ」

「あん…ありがとう…」

「ニギハヒますう…えへへ…」

「えへへへへ…オナニー…はあ…オナニ大好キですう」

「…あ…見え…ますか？」

「…はあ…シリカの…エロまんこ…ちゃんと見えますか？」

「…あ…」

「…はあ…」

「…はあ…」

「…はあ…」

「…はあ…」

「…はあ…」

「…はあ…」

「…はあ…」

「…はあ…」





「今まではランスとか盾とかやっていたので肉便器としては不慣れなところもありますが……」
「その……精液いっぱい流しかけて、生きていられることを実感させていただけると嬉しいです」

achi
250,000 cd

グリ

「オークションに参加してくれてありがとうございます、シリカです。私のお父さんみたいに、いっぱい甘えさせてくれるおじさん、お待ちしております」
「サ、サチです……助けていただけありがとうございます」

ca
000 cd

グリ

「こんばんわ、アスナです。現実世界では受験勉強ばかりです……い退屈していました。髪のあるセックスに憧れていますので、私の処女を奪って大人にしてくれる人、落れをお願します」

Asuna
9,850,00

「どうもーリズベットです。牛コキ、パイズリフエラから蒸服までなんでもオッケーです。おチンポのメンテナンスなら是非、お質と実績のリズベット武器店をよろしくお願します」

3: Lisbeth
6,650,00

グリ

3: Lisbeth
6,650,000

「一番の…アスナ君と言ったかね。素晴らしい乳房をお持ちのようだが、感度は高いほうなのかね？」

「はい。ブラジャーを着けてなかった頃は……体操着と乳首が擦れるのが気持ち良くて……ちよと困っちゃうくらいでした」

「体育の授業中に、ちよとエッチな気分になってたりして……」

「はあ……今も、おじ様達に見られて……おっぱいの尖っぱ、硬くなっています……」

「それではさぞ胸も疼いじかたないでしょうな」

「はい……乳首もクリトリスも、もっかがちなんです……早く私を」

「落れしてください……おじ様の大きな手で、おっぱい揉みしだいで」

「勃起乳首、舐め回して欲しいんです……」

Sachi
5,250,000 Gd

「なんと、こんなお若いお嬢さんに我慢をさせるわけにはいきませんな。1番に400万！」



「貴重な初めてを他の男に乱暴に扱われては可哀想だ。」
「一番「Lisbeth」だ。」

Sachi
5,250,000 Cd

2: Illica
150,000 Cd

3: Lisbeth
6,650,000 Cd

おじさん達にエッチな目で見られて……
恥ずかしくて……
興奮して……

「……はあ……見えませんか？
シリカのココ……
もっ……
こんな……
濡れちゃってるんです……」

「セックスについては……
学校の授業と、あと……
女の子向けの、ちよつとエッチな本も読んでました……
女の子の……おまんこに入れるんですよね……」

ドロ……
フリ……
フリ……
キン……
キン……

トロ……
キュウウウ……
キラ……
トロ……



「こちらじゃありません。」

「温かい飲み物はいかがでしょう？」

「ハキハキとした明るい声。」

「最高の笑顔をもって、シリカはお客様を出迎えた。」

「見せ付けるようにして大股を開き、ウェイトレスらしくその商品価値をアピールする。」

「当店自慢の、絞リたて生ロリラガジュースです。」

「頑張って作りますので是非是非美味ください。」

「ああ、やっぱりシリカなんだ。メールを見たときは少し驚いたけど、ほ、本当にウェイトレスをやっていたんだね……デブ……」

「えへへ、ありがと、つなぎますお客様。」

「えと、こちらの……おまんこのパイプにスイッチがありますので、そちらをONにしてください。」



「ト回……」

「イっくっくっくっ……」

丸いおとがいを反らし、四肢を痙攣させ、ウェイトレスの少女が快感の頂を仰ぐ。

控えめな雨音と共にシリカの恥部から透明な液体が噴出し、同時に男の赤黒い鈴口から白濁液がぶっかけられた。

「はあ……はあ……はあ……あ……」

「はあ……はあ……はあ……あ……」

悦楽の余韻を熱い呼吸に乗せて吐き出す。

「はあ……はあ……あ……ん……あ……あれ……」

プジャ

グイグ

ジ

トロ

程よい疲れに浸るシリカの前で、客の男は未だ空のグラスを見つめていた。

とっちらから恥部から噴出したシユースは、

グラスに入ることなくお客様の顔を濡らす結果をもたらしてしまったらしい。



「あん……あ……えひ、えひひひ……」

「……おまんこジュースう……じよばじよがあぁ……へひひひ」

ドリンクサーバーの前には、少女の愛液に身を濡らした男達。その足元には現実世界ならありえないサイズの水滴りが出来ていた。

「お客しゃまあー……シリカの、ロリまんこジュースをお

お求めによおお客しゃまあ……おお、お待たしえれしゅうううう……」

だっしなく開いた唇からは淫語を垂れ流し

下半身のそれからは透明な液体が撒き散らされる。

「淫乱シリカのお……アクメ汁は、いかがれしゅかあ？」

「……あん……あつ……ら、ラブジュースう……」

「絞ってたの、ロリまんこジュースじゅうううう……えへ、えへへへへ」

緩んだ頬と濁った瞳。

シリカは幸せそうに微笑えんだ。



「ポールダンスは初めてなんだけど……えへへ」

挑発的なBGMに乗せて腰を振り、ポールに絡ませる均整の取れた四肢。

「後ろの人。ちゃんと見えてるかな？」

「もっと前の方に来て好きになように見て良いよー」

ポールに恥部を擦り付けるようにして股を開き、腰を突き出し、

スカートのその奥を晒す。

ブル

フリフリ

女の色香を撒き散らしながら、

ステンレス素材を模した銀色の棒を掴んでのセクスアピール。

「これじゃスカートの中丸見えだよー」

「もぉ……みんなエッチなんだから……」

微笑みながらゆっくりと舞台上を回り、

脱げかけた装備からチラつく肢体を男の一人一人に見せ付ける。

「はーい。それでは、**血盟騎士団副団長、閃光のアスナ。**

ストリップしまーすよ」

「えへへ、どうかな。リアルでは学校指定の水着くらいしか着たことなかったんだけど…」

「ちゃんとオナニーのおかげになってたら嬉しいなよ」

可愛らしい顔立ちに柔らかなライン、成熟過程の少女特有のあどけなさ。

そして、それらを押しつけるようにして存在感を示す際どい水着と、

どきつい女の色香。

ブル

肉付きの良い大腿部から緩やかなラインを描く腓腹筋、歪みつ無い爪先。その二つをポールに絡ませ、セックスアピールを見せ付ける。
「ちよっと大技に挑戦してみようかな。」

水着がズレちゃうかもじゃないけど、

うっかりおまんこ見えちゃったからってNGコールしちゃ

ダメだからねー」



「や……っあんっ……」

「あ……っんう……あぁ、これ……ポールとあそこが擦れて……」

「ちよっと気持ちいいかも……」

薄暗がりを取り取る照明の中で、汗ばんだ肌が扇情的に揺れる。いつの間にか汗以外の液体が少女の下半身、主に股の辺りを濡らし始め、水分を含んで半透明になった白い水着が肌に張り付いていた。



「んう……男の人に……見られながら……はぁ……」

「おまた……ニオリ付けてると……変態女って感じがして……」

「恥ずかしくて……はぁ……アソコが……濡れてきちゃったの……」

言葉を紡ぐ間にもアスナの腰は淫らに揺らめき、弓状に反らした胸の上で張りのある乳房がたゆんと弾む。

「もっと……もっと見て欲しいの……」

「私の……淫乱アスナのはしたない姿で……」

「あ……おちんちん……勃起させて欲しいのお……」

「えへへ、おっぱいもおまんこもおぜしんが、見えちゃうよお……」

ポリゴンデータにしても美しく淫靡なその肢体に、

客席の男達のそれがさらに硬度を増して行く。

「うん、良いよ……おちんちん擦って良いよ……」

はあ……私もおまんこでちゅくちゅするから……あん……一緒に、

オナニーしようっしょっ

少女の割れ目から零れた液体が、舞台の染みをさらに広げて行く。

「えへへ……あんっ……ああ……変態っ、変態なのお……」

アスナはあ……おちんぽの中で……はあ……

おまんこ露出して興奮しちゃっ、変態女なんですっ……」



「あはあつ、キたあつ、おちんぽ汁キたあつ。

うれしいれじゅう……ああん、セーエキどろどろだよお……

あ……はあ……えへへ……えへへへ……」

栗色の髪の毛から柔らかな乳房、白桃の尻まで濃厚な雄の精に包まれ、蕩けた痴女の顔でアスナが微笑む。

ドロン
ブルン

キン
モシ

「えへへ、だってえ……こんな……」

ああ……ドロドロのおちんぽ汁かけられたらあ……

誰だって……はあ、エッチなこと……頭が一杯になっちゃつよお……

あ、やあ……また……ああ……っ」

びちゃびちゃと音をたてて、少女の身体はどまでも汚れて行く。

「あんっあんの……はあんの……ああ……」

おまんこくりくりするの止まらないよお……っ」





「それじゃあ、ローションかけて行きまーす。

ちよっと冷たいかもおれないけど、我慢しててね」

「んふっ……」

「U……」

「あんっ……動いちゃだめ。あなたは、ただ寝ていれば良いの」

「す、すみません」

「ふふ、女の子のカラダ……気持ちイイでしょ……」

ニ

さわ……

「いつもギルドに尽くしてくれてるから……」

私からの……お礼、です……はあ……カラダ中ぜんぜん

洗ってあげるからね……」

クリ



「どこか…痒い所、気になる所は、ありませんか?」

「ちゅ…うわ…副団長…」

「んふ、良いコね…そのままですよ…」

「んっ…ふふ…今、ビクってしまいましたね…」

ハ〜♡

スリ♡
スリ♡
「っ♡」

さわ…♡

「ココが、気持ちいいんだ?」

「ココを触られると…」

「またビクって…カワイイや」

「あは、」

クリ♡

クリ



「ん……ちゅ……っ♡んう……ん、ちゅ……」

「あ……動いちゃ♡えろ……ダメですよお……」

「……えろれろれろれろれろれろれろれろれろれろ……ちろちろ……」

「べろお……じゅろ、」

「えろえろえろえろえろえろえろえろえろお……」

「……じゅお……」

「えろ♡」

「えろ♡」

「えろ♡」

「えろ♡」

「大の大人が……れろ……自分よりも、年下の女の子に……」

「おちんちん舐められて……こんなに……はあ……えろお……」

「びくびくさせちゃって……んふ、ダメな人ですね……」

「さわ……♡」



「ペろ……れろお……はあ、また……」

「おっきくなっけきましたたね……じゅるう……」

「……私の口で……もっと、シて欲しいんでしょっつん。」

「……んふ、嘘付いてもだーめ！」

「おちんちんは……んなに……はあ……正直なんだからあ……」

ハ
〜
♡

じゅるる;

ドロォ……

フ
フ
……
っ……えら……ペろ……
……じゅるる……れろお

あ……はあ……
……いよ……ん

まっ一回……しよっ

ハ
♡
♡

ク
♡

さわ……♡

ク

「んもぉ」
牛の口から漏れる、牛らしい鳴き声。

大きな双丘を揺らぐ、栗色の美しい毛並みをもつそれは、
実に可愛らしい牝牛であった。

「よう、牛っ。今日も乳をもらいに来たぜ」

「んもぉ……んもぉ……」

軽く撫でてやる。牛は嬉しそうに頭をへりへりとする。寄せてきた。

別段スキンシップを取る必要は無いのだが、そこは単純に気分の問題だろっ。

「も……んもぉ……っ……んもぉおぉ……ふもぉ……」

牝牛と農家のおやじさんが腰をぶつけ合うのどかな風景を、微笑ましく眺める。

「も……おっ、おあん……もほお……ふも……おん……んもおん……」

牛っっは妙に艶っぽい啼き声。可愛がきんんの顔。

「んもっ」

とっじましたっどっう風に小首をかしげる牛。

その仕草にキモッさんは思わずにキリッとした。

ブムン

「カワイイな……」

「おっ、うちのアスナは街一番のべっぴんさんだてねえ……」

手塩にかけて育てた、最高の牝牛やで」

「ふも……おんっ
一段と重い挿入音。」

悦楽の色に蕩けて行く牛の顔を見ながら、
キモトさんは下半身が硬くなっているのを感じながら……
まいったな、獣姦癖なんてないのに……

「もお……んも……っもお……んもおっ……おん……
ふも……おっ……おん……

股を盛大に濡らしながら、牝牛が腰を振る。

牛乳二杯を得るためのこの待ち時間が苦痛になりながら、
キモトさんが暇を持て余して、おんがのうたをうたっている。

「もっ……
だらしない顔で腰を振る牝牛の姿は、

第二層で代わり映えのない生活を送るキモトさんにとって一種の清涼水であった。



「ふも……っおん、ふもおっ……もっ……ふもおっ……
畜舎小屋に響くレスト音が、より重く、くもったものへと変わる。

「ふも……っおん、ふもおっ……もっ……ふもおっ……」

「これは……ちょっと、やばいかも……」

全身を触手に絡め取られ、シリカの身体は宙に浮いた状態だった。
視界を埋める。ピンク色の肉鳶を前に、シリカは呻く。

「ふ……んう……や……あふ……っ……あ……や……」

くすぐったい上に気持ち悪い。

触手の表面にびっしりとささくれ立つ弾力のある肉棘はそれぞれが個々に蠢き、シリカの反応を確かめるように、全身をくまなく撫で回していた。

ル

グ

キ

ニムル

ニムル



そのショーツの中に肉蕪が滑り込み、シリカの口から甘い吐息が漏れた。
年の割りに肉付きの良い臀部を、触手が這い回る。

「んっ……あ……」

「んっ……あ……んっ……あ……」

「んっ……あ……んっ……あ……」

「んっ……あ……んっ……あ……」

「んっ……あ……んっ……あ……」

「んっ……あ……」

「んっ……あ……」

「んっ……あ……んっ……あ……」

「んっ……あ……んっ……あ……」

「んっ……あ……んっ……あ……」



「ん……けほっ……んはっ……はっ……はっ……はっ……はっ……」

「はっ……あはっ……っあ……っ……っ……」

口から外気を取り込みつつ、犬のように舌を垂らす。

その瞳からは冒険者としての強さも意思も失われていた。

「あは……ちんぽお……おちんぽくらしやあい……」

濁った瞳、緩んだ眉。

心に浮かぶ言葉をそのままに、意味も考えずに口から垂れ流す。

「……あ……触手しゃんの……ぬりぬりおちんぽお……」

「シリカの、おまんこ……お願いしますう……」

ニムルッ

ニムル……

ズワッ
ズワッ
ズワッ

グワッ
ガッ

ビクン

トッ

ッ

ゴッ

ズワッ

ズワッ

ズワッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ



「触手しゃんが満足するまでえ...好きなように、あんっ
おまんこじゅぽじゅぽしてイイよお...えへえへえか...」

ドロォ
ブル
グワ
ゴッ
ゴッ

ビクン
ジュッポ
ジュッポ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

あはあ...あ、アケメ汁、ですぢぢちやうづづづづ
あはあ...あ、アケメ汁、ですぢぢちやうづづづづ

あんそつ...おなかの、ほう...あつあつ...イク...いじじ
あつあつ...あつあつ...あつあつ...あつあつ

あつあつ...あつあつ...あつあつ...あつあつ
あつあつ...あつあつ...あつあつ...あつあつ

あつあつ...あつあつ...あつあつ...あつあつ
あつあつ...あつあつ...あつあつ...あつあつ

あつあつ...あつあつ...あつあつ...あつあつ
あつあつ...あつあつ...あつあつ...あつあつ

あつあつ...あつあつ...あつあつ...あつあつ
あつあつ...あつあつ...あつあつ...あつあつ

「恥じらいが足りないねエースナ。」

僕としては、ストリップみたいになつてほしいと脱いで欲しかったんだがね」

「お互い暇ではないのですし、」

作業は手の取り早い方が良いんじゃないですか？」

ギョウ

ブルン

ブルン

「なるほど……せめてその尻を握りたいな。」

「ふふ……その顔がたらしなく緩んでいく様を思うと、本当たまらないよ」



「あう……あふ……あ……あ……ああ……っ……」

はあ……あ……あ……」

視線を宙に漂わせながら、アスナは涎を垂らした。

「ずいぶん大人しくなってきたじゃないか。」

「ようやく僕のを受け入れてくれたのかなあ？」

「ち、ちが……うっ……あっ……ああ……っ……」

「んん、おお……中がすごい事になってきたじゃないかアスナ。」

「このうねり、絡みつき、指先を嘗め回されているような気分だよ」



「あん……あ……言わなごでえ……ああ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」

「あ……あ……っ……ん……あ……あ……っ……」



「あつっ……あえああう、あおうっ……っおほあつ」
「良い声で啼いてくれるじゃないか。
録音して全フレイヤー諸君に聞かせてやりたいくらいだよ」

「くひひひ。まるで獣みたいに鳴くじゃないか。
どっせなら牝犬に成り下がって、ワンでも吠えてみたらどうなんだいっ」

「……っぐっぐっ、ふいじゃけえあへえあはあああああつ」

「あん……あひ……あつ……あんっ……あんっ……あんっ……あんっ……ああ……」

「ああう……っ……あう……あうっ……」

ブルン
ビュク
ズン
ズン
ドロ

ビクン
ビクン

ガク
ガク



「あつっ……あえああう、あおうっ……っおほあつ」
「良い声で啼いてくれるじゃないか。
録音して全フレイヤー諸君に聞かせてやりたいくらいだよ」

「くひひひ。まるで獣みたいに鳴くじゃないか。
どっせなら牝犬に成り下がって、ワンでも吠えてみたらどうなんだいっ」

「……っぐっぐっ、ふいじゃけえあへえあはあああああつ」

「あん……あひ……あつ……あんっ……あんっ……あんっ……あんっ……ああ……」

「ああう……っ……あう……あうっ……」

ブルン
ビュク
ズン
ズン
ドロ

ビクン
ビクン

ガク
ガク

「……ふ、フルダイブシステムをこんな事のために利用して、人の形まで捨てるなんて……科学者として最低の行為よ。あなたは間違ってるわ」

キッ

ゴゴゴゴ……

「この人外アバターを操作する試験だって、ヴァーチャルリアリティの発展には欠かせない研究の二つなんだよ」

「だ、だからってそんな……」

「気色悪いモンスターを自分で操作するなんて……」

「この世界の身体は自分自身なのよ。お、おかしいとは思わないの？」

キョウ



「ぬ、濡れてなんか……あ……んっ」

「ふ……はあ……ぐ……う……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「我慢しなくて良いんだよアスナ。捕らえられたお姫様は、悪者にその身を汚されてこそ輝くといふものだ」

「だ、誰があなたなんか……」

「あ……はあ……んっ……」



「もつとだ。もつとその屈辱に満ちた顔を見せてくれたまえ」

ふんっ... はっ... ひび

んっ... っ... っ...

ニャニャニャ...

フー... フー...
ニャ...

ニャ...

ニャ... ニャ...

ニャ... ニャ...

ニャ... ニャ...

ニャ... ニャ...

ニャ... ニャ...

トロ〜

ひっ... あっ... あっ... っ... っ... っ...

ああはあ... あんっ、 あんっ、 ああ... やめっ... やめて

だめ... あは、 はあっ... はあっ...

ん... ああ... ああ... っ...

「アーン……カッ」

卑猥な音をたてながら、インゴットがリスベットの膣内へと飲み込まれていく。

「……あは、すげー。こんなに大きいの始めてかも」

ブルン

ブルン

ゴリゴリ
ゴリゴリ

ジュッポ

ッポ

出来るだけ同じリズムで、丁寧にインゴットと自身の腰をぶつけ合う。

これだけ太くて遅しいインゴット……きつと素敵な武器になるに違いない。

「……んふっ……」

「……んふっ……」

何かがおかしいと思いはじめたのは、三百回ほど叩いた辺りからだ。

「……さんびやくはち……さんびやくきゅう……はあ……」

「さんびやくじゅう……さんびやくじゅういち……はあ……」

ブル

ブル

さすがに少し、かかりすぎではないだろうか。

ブル

ブル

ジュッポ

「……おが……しいなあ……」

インゴットは汁に濡れ、灯りを反射するほどに輝いてはいるが、

それでもインゴットのままであり武器と呼ぶには至っていない。

「……はあ……さんびやくじゅうはち……」

「さんびやくじゅうきゅう……さんびやく……ろくじゅう……」

「な、なんで……あ……なんで武器に、ならないのよお……」



「あんっ……ん……あぁ……イイわよ……その調子……」

花屋が花に語りかけるように、飼育員が動物に声を掛けるように、リスベットは股下のインゴットに向けて笑顔で腰を振った。

「んふ……あんっ……すっぴい、インゴットちゃんぽ、気持ちイイよぉ」

心なだが、インゴットがより硬く反り返ったような気がする。

「んふふ……あたしの……あん、おまんこハンマー気持ちいい」

ブルンッ

ブルル

ゴリッ
ゴリッ

ジュッポ

ブッポ

ブッポ



「あは、すとおい……こんならじのこっぴー……」
やはり素材に対して、語りかけることが重要だったのだ。
んふん

リズベットは音を立てて腰を打ち下ろした。
弾けた汁が金床を濡らす。

ブルルン

ブルン

キュウウウ

ムッポ
ゴリゴリ
ゴリゴリ

ジュッポ

プッポ
プッポ

「ねえ、気持ちいい？ リズベットのどすけべおまんこ気持ちいい？」
うん……うん……えへへ、そうだよね……気持ちいいよね。
インパクトおちんぼ……あん、こんなじ……ビンビンだもんね……あ……んふふ

「リズベットさんの、ああ……ドスケベおまんこ……
気持ちいいですって……もっと言っえ……」



「えっ……うん、うん……えへ、あたしもお

あはあ……気持ち、イイわよお

「ほら……ね？エッチなおつゆが……はあ……

いっぱい出てるの……わかるでしょ……？」

ブルン

ドロォ…

ブルン

ムム

グジュッポ

プッポ

キョウガ

「あたしね……あ……あふ……

感じて、るの……インゴットおちんぽでえ……

「リズベットのぐしよ濡れおまん……喜んでやってるのぉ……」

「ああしゅ……ん……あう……ああ……あん……あん……あん……あん……ああん……

ハハハ

グジュッポ

ドロォ

プッポ

「ま、待って……ん……ああ……だめ……だめ……はあ……

「インゴットちんぽ……気持ち、イイ」

「それでは…第75層、フィールドボスの攻略会議を始めます」

出来る限り落ち着いた声で紡ぐ第二声。部屋中のプレイヤー達の視線が一斉に集まる。

逃げたくなる気持ちを抑え、アスナは平然の限りを尽くして見詰め返した。

「本今朝、偵察隊のメンバーがフィールドボスの所在ポイントを突き止めてくれました」

「…突進とグレスを組み合わせさせた典型的な動物型のようなです」



「ちょ、ちょっとか……」

尻を揉みしだく隣の男に、アスナは小さく抗議の声を上げた。

「いやあさすがは副団長様だ。その凛々しさととてもローター仕込んでるとは思えない」

ビクッ

モッ
モッ
モッ
ムッ
ムッ
ムッ

「はあ……あ……」





「……こっ、攻撃の…バリエーションは、

豊富ではなさそうですが……っ……モゴホン

「……こっ、攻撃の…バリエーションは、

羞恥と快感で震える声を、軽い咳払いでこまかす。
アスナは出来る限りいつも通りの声を意識しながら口を開いた。

「その分単純な攻撃に秀でていると思われますの…で、

決して、油断はしないでください」

「……あ……はあ……」

へっ……

グ……

ビクッ

グ……

ピク

キ

……

モゴホン

周囲に聞こえないように、快楽の余韻を唇から漏らす。

仕込まれたローターは乳首を元に位置座標を固定しているらしく、
どれだけ身をよじっても逃れることが出来ない。

「あんな風にシカトしちゃ、キリト君が可哀想なんじゃないのかな……
僕だったらきつと傷ついちゃうね」

「だ、誰のせいだ……こんな……はあ……ん……っ……」

漏れかけた甘い声を飲み込む。



「……あ……はあん……あう……」
部屋中の視線から逃げるように無言で須郷を睨み付け、胎内から湧き上がる快感に耐える。

「あまり黙りにくつていると、みんなに怪しまれちゃうよ」

「そんなことはあ……わ……わかっています……」
軽く息を整え、恥ずかしさから卓上に落ちていた視界をアスナは無理やり前方へと放り投げた。

「それから……こんかいの……ていさつではあ……コホン」

「めんなさい……はあ……はあ……えと……その、復察では、」

「段目のHPバーをろ割削る程度で引き返しましたが……」

「あ……はあ……あ……あはあ」

「グイッ」

「ググググ」

「モゾモゾ」

「ビクッ」
「トロ」
「アッ」
「アッ」
「アッ」

「……あ……はあん……あう……」
部屋中の視線から逃げるように無言で須郷を睨み付け、胎内から湧き上がる快感に耐える。

「あまり黙りにくつていると、みんなに怪しまれちゃうよ」

軽く息を整え、恥ずかしさから卓上に落ちていた視界をアスナは無理やり前方へと放り投げた。

「それから……こんかいの……ていさつではあ……コホン」

「めんなさい……はあ……はあ……えと……その、復察では、」

「段目のHPバーをろ割削る程度で引き返しましたが……」

「あ……はあ……あ……あはあ……」

「グイッ」

「グググググ」

「キョ」

「モッモ」

「ググググ」

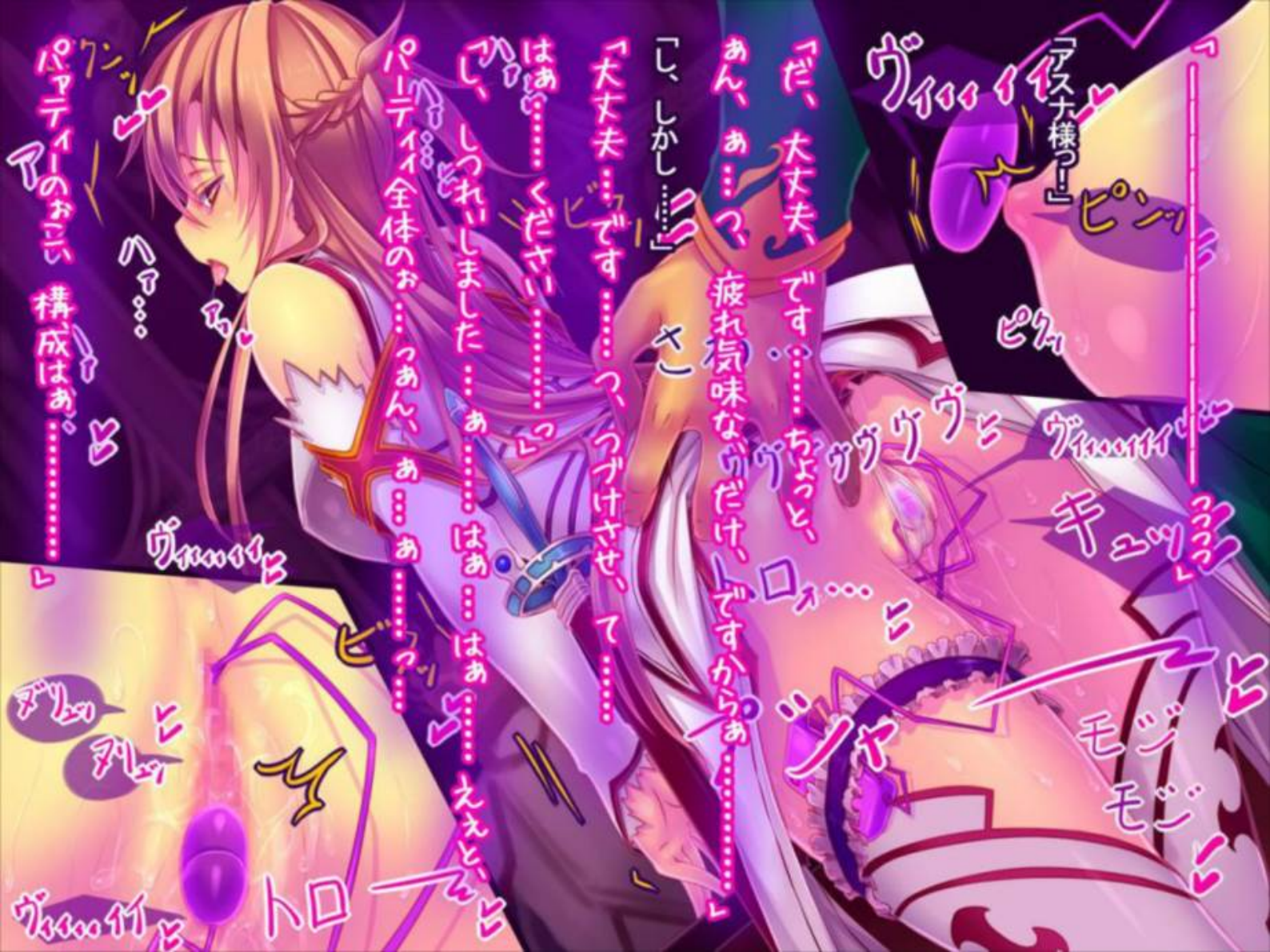
「ビクッ」

「ム」

「トロ」

「アッ」

「ググググ」



「アスナ様?」

グイイイ

ピン

ピク

「だ、大丈夫、です。……ちよっと、

あん、あ……? 疲れ気味なりだけ、ですからお

「し、しかし……」

「大丈夫……です……つ、つづけさせて……」

はあ……ください

しつれいしました……あ……はあ……はあ……ええと……

パーティー全体のお……っあん、あ……あ……

パーティーのお……っあん、あ……あ……

パーティーのお……っ構成はあ……

グググ

グググ

キョウ

ロ……

モッ
モッ

アッ
アッ

トロ

グググ



「無理をしちゃいけないな」

アスナの身体は須郷に抱き寄せられていた。
ロープで包み込むようにして、少女の蕩けた顔を隠す。

「キリト君のステータスはちゃんと上げておくから、安心してくれたまえ」

「……続けなきゃ……はあ」

「……続けたいとおかしい」

「……会議……あん」

「……モッモ」

「……あ……でもお」

「……ビク」

「……グ」

「……ハア」

「……ハア」

「……アア」

「……ハア」

「……ローターを……仕込まれて……」

攻略……中なのに……感じてました……？」

「んん、聞こえないね。」

副団長らしく、大きな声を張って言うらしい。

「が、会議中に……はあ……ローター……で……」

感じてましたあ……」

「情報は具体的に述べたまえさ」

「あいつ……あ……はあ……す、すみませ……ぐりぐり……ああ……」

「んく……はあ……こ、攻略会議中に……リモコンローターで……」

身体中を……あ……い、弄られ、て……」

おまんこ、グシヨグシヨに濡らしてましたあ……」

ト

キューキュー

ぐりぐり

ぐりぐり





「ほほお、ぬるぬるじゃないか…」

ロータープレイがずいぶんとお気に召していたようだね」

ビク

ゲゲゲ

おほおほ

おほおほ

「おち、違あう…の…そんなじゃ、

「んん、何度も達してしまっただろうっ…こんな風に……」

「はい…です……」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「んん、何度も達してしまっただろうっ…こんな風に……」

「はい…です……」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

「あー、あー」

ビク

トロ



「はあ……はあ……はあ……あ……はあ……はあ……」

「そう残念そうな顔をしないでくれたまえ。そろそろ「イツが欲しいだろっ?」」

「さあ、足をもつと開いて……くひひ、準備万端じゃないか」

「ん……」
ビクッ
ビクッ

ビクッ
ケケケッ

キキキッ
ウウウッ

ビクッ

トロ



ニコッ

「うん……」

「動いてみて良いかな」

「あはは、私もすっごくキレキレしてる……
好きな人に抱かれるのって、こんなに気持ち良いんだね……」

ブルン…

ブルンッ

チュッ



「あ〜ん……」

「うん」

「やめろ…お尻に挿れちやうど……」

「ん…ほんと？」

「そう言ってもらえろと…あ…嬉しいな…えへへ……」

「ブレン…」

「チュプッ」

「ニブルンッ」

「ハッ……」

「ハッ……」

「ちゅ……ん……はぁ……愛してるって、言って…

あ……愛してるって……ちゅ……はぁ……お願い……」

「……愛してる……。アスナ……好きだ……」

アスナを……愛してる……」

「私も……好き……あ……

キリト君が大好き……

あ……ふ……んちゅ……」

「アスナ……俺……」

「良いよ、キリト君……そのまま……あ、中に……」

中に出して……」

「アスナ……」

ハァ……

チゅ

ビュッ

ブルンッ

ハイ……♡

「キリト君……キリト君……もっと愛して……

私を……離さないで……」

「うん、良いよ……」

キリト君にこんなに喜んでもらえて……」

すく喜びの……」

「でも、アスナは……」

ニコッ

ブルン…

ブルン

ビュッ

ビュッ

チュッ

「私も……気持ち良かったよ。ありがとうキリト君……」

ハイ……

♡♡

「ねえキリト君……愛してるって、もう一回言ってみ……」

「一度落ち着いちゃうと、結構恥ずかしいんだけど……」

「お願い……」

アスナがその言葉の通り、愛を強請るように顔を近づけて来る。

「お、おう……えと、あ、愛してる……」

「もう一回……」

「愛してる……」

「もう一回……」

「愛してる……」

「もう……」

「……」

「ん……ふふ……キリト君の寝顔を、

眺めていたのになーって思っ……えへへ……」

「えー……」

「これは今後のための訓練です。頑張っ……寝てください」

「……」

「……」

「君だけは……絶対に守ってみせる……」

「……うん、ありがとっ」

そう、この笑顔を守ってみせる。

今度こそ、絶対に。





「……ガチガチの、勃起ちんぽお……」

「どろゆるうんぷんぷんしれ……あん……」

「エロおちまん……中出しアケメ……」

「じゅいまだあ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

ドロオ……

ズンズン

「みなさん、私に何か用ですか?」

「い、いやあ…何か、珍しい装備だな…って思っ…」

「そ、そうそう、そんなに…その…カッコ良い装備?」

見たこと無いから、気になっちゃってさ」

しどろもどろに答えながらも、男達はシリカを中心に円を描いて囲んで行く。

ばつが悪さよりも、最高峰の装備を見たいという欲求が勝っているらしい。

「そんなに…私の装備が気に入りますか?」

「じゃ、じゃあ…ちよつとだけなら、」

じっくり見ても良いですよ」



ピンク色の薄い生地を勃起した乳首が押し上げ、
胸にひっぱられた分股間にくいこんで行く。

「うおおおおおー……っ」

「みるよあれ…土手が丸見えじゃないか……」

「ス、スクショ撮っても良いっすか?」

「はい、良いですよ」

「うおお、ありがとうございますー」

荒い鼻息と共に数人の男が記録結晶をオブジェクト化させる。

「最高だよシリカちゃん…もっと、もっとお尻見せて……っ」

「あん…もう……ふふ」

みんな撮りすぎですよ

あ

「え、今なんて?」

「ろ、露出まん…ええっ?」

目と口を開けて驚く男達のその反応さえも心地良い。

「んふ…露出まん…ですよう…ほら…」

「たくさんの男の人に見られて…こんなに、濡れて…」



「びしょびしょになっちゃってるよシリカちゃん」

「もしかして、見られて興奮してるのっエロい気分になっちゃってるのっ」

「あん、もう…そんなエッチなコト、

言わないでくださいよう……… 恥ずかしくて、嬉しくて…

…女の子には…あ…よくあることなんですう………」

「んふ…みなさんがいろいろ見るからあ…

シリカのエロ乳首、ピンピンになっちゃったんですよう………」

「えへへへ、もっと…もっと見て…もっと撮影して………」

シリカの勃起乳首も…ぐしょ濡れおまんこもお………」

皆さんの目で…あ…犯してください………」





「あんっ……あんっ……あんっ……あはあ……っ……あん……
（ああん……ああん……んう……）」

「外でいくの気になったみたいだねシリカちゃん。中がまだ動いているよ」

「あん……だっ……露出アクメ……のはあ、すしすぎて……
アーン」

「おちんぼまだ……離したくないんです……」

「ハァッ……」

「クム……クム……クム……」

「ああ……す……おじさんたちの勃起ちんぽ……
びんびんに振り返って……私も……おまんこ疼いてきちゃっ……」

「あんっ……もっと……もっと見て……」

「変態シリカのロリまんこもっと見てえ……」

「中年ちんぽくわえっばなしの、どすけおまんこ……あ……あ……あ……」

「がわが」

「フッ……」

「ジュポッ」

「ジュポッ」

「♡♡」

「ビクッ」

「アッ……」

「クム……」

「クム……」

「♡♡」

「♡♡」

「♡♡」

「♡♡」

「♡♡」

「♡♡」

「……………変わった形の便器だな」

「12年ほど“トイレ”に触れていながらどうも覚えではあるが、



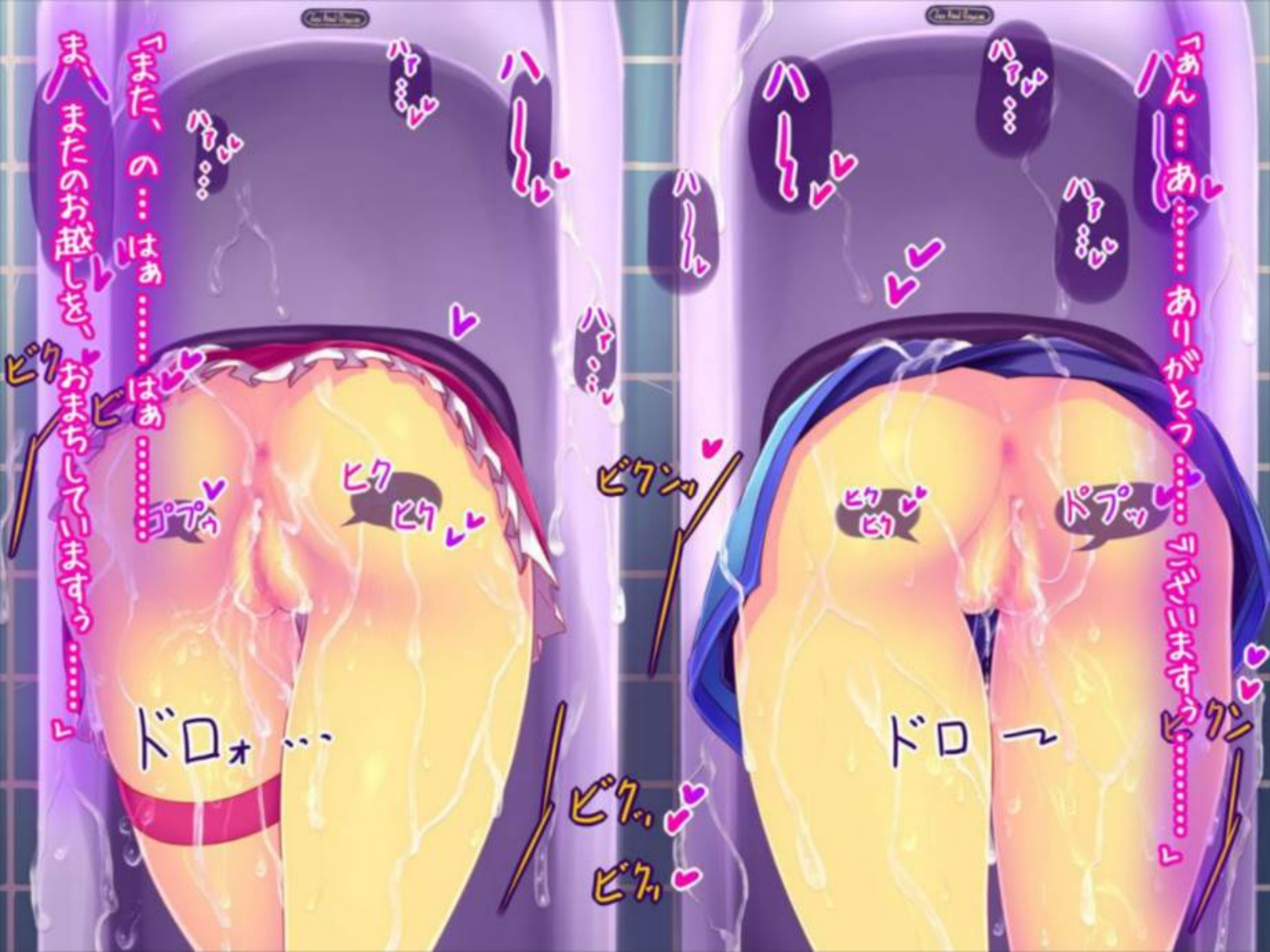
便器というものは、もう少しシンプルな作りではなかっただろうか。

概ねの形はあっているのだが、細部に「こ」が引っかかりを覚える。

「うーん、こんなだったかな……………」

まるで便器の穴から女の子の尻が突き出ているような、そんな違和感。







「……あ……んちゅ……ちゅ……はあ……あ……

えろ……っ……はあ……べろお……

「んちゅ……だって……須郷さんが……っ……

んぶうっ……んむ……んうう……

「んふん、新妻アスナ。

今この場では名前ではなく『アナタ』と呼んでくれたまえ」

ぐわっ

ぐわぐわぐわ

トロー

「んう……ぶは……けほ……はあ……はあ……

ア、アナタが……わらむに……ちゅ……

「こんな……はあ……いやらしい道具……ハメたから……」

「……あ……誰とも、セックス……出来なくてえ……」

えろお……じゅうろ……はあ……辛かった……ですう……

えろお……じゅうろ……じゅうろ……えろ……ぺろ……あはあ……」

「くひひ、また浮気でもされたらたまらないからねえ。

すまなかつたね、アスナ」

「そ、そっと思っつなら……ぺろ……早く……

ん……外して、ください……」

コス

ニギッ

ハハ

ペロペロ

ペロ

ペロ

ペロ

ペロ

ペロ

グググググ

グググ

トロ

「そうだね、早く外して僕とのセックスを思う存分楽しみたいよね」

「ん……ちゅ……アナタと、したいわけじゃ……」

あふ……ん……じゅうろ……」

「場所を変えようか。僕の部屋で君の喜びそうな用意が整っている。」

「このままついて来てくれるとありがたいが…」

「そこはアスナの意思にまかせよう」

「私は……ん……はあ……」

同意も拒否も示せないまま、アスナの心が恋と淫欲の間で揺れ動く。

答えの出ない少女に、須郷は唇の端を吊り上げた。

「キリト君に強くなつて欲しいなら…」

「彼のためを思うなら、僕についてきたまえ」



「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」

「くひひ、僕と一緒に来てくれるねっ」

「はあ……ん……はあ……」

「はあ……ん……はあ……」



「ぐんぐん……ふんぐん……うんぐん……」
「ふふ……また、イっちゃいましたね……」

「でも……まだまだ……満足していませんよね……生のおちんぽで、中出しアクメしないと……マングクできない身体なんですよね……」

「おっさん達もお……オナニじゃ足りないみたいなんですよ……」
みんな、アスナさんを犯したいって……アスナさんのおまんこに中出ししたいって……おちんちんおっきくしてるんです……

「ふふ……感じますよね、おっさん達のいやらしい視線……アスナさんの……」

「バイブくおえたままのエロまんこ……じっくり見られていますよ……」

「おっさん達もお……オナニじゃ足りないみたいなんですよ……」
みんな、アスナさんを犯したいって……アスナさんのおまんこに中出ししたいって……おちんちんおっきくしてるんです……

「おっさん達のいやらしい視線……アスナさんの……」



「はぁ... あん... じゅる... あ... はぁ... んく...
おちんぽと答えないと、おちんぽはもらえませんかよ」

「... はぁ... あ...
お、お... ぽ... 欲しい... です...
「ぼってりちんぽと、勃起ちんぽ... どちらが欲しいんですか？」

「りよ、両方... お、おじ様の...
「極大ぼってりちんぽも... ほしい、ビュン...」
「あ... 勃起ちんぽも... 両方... 欲しい、ですうう」

ドビュウ

トビュウ

トコ



「おじ様の、おちんぼで...アスナの Ero まんこ、犯して欲しいんです...」

「バイナでイっても...おまんこ汁、止まらないんです...生ちんぼじゃないと...駄目なんです...」

「どっか...おちんぼ無しじゃ生キられない...肉棒中毒の淫乱アスナに...おじ様ちんぼ恵んでください...」

「...ふ、大きくて嬉しい、おじ様ちんぼで...トロトロの肉壺まんこ、ずっぽりハマられて...ああ...壊れるくらいに...シユホシユホして欲しいんです...」

「おじ様の...熱い、おちんぼ汁で...ああ...ダメまんこ...」

ビクンッ♡
ビクンッ♡

ドビュウ

グググググ

ググググ

トロ

ドビュウ



「おじ様の、おちんぼで……アスナの Ero まんこ、犯して欲しいんです……」

「バイナでイっても……おまんこ汁、止まらないんです……」

「生ちんぼじゃないと……駄目なんです……」

「どっか……おちんぼ無しじゃ生キられない……」

「肉棒中毒の淫乱アスナに……おじ様ちんぼ恵んでください……」

「……ふ、大きくて嬉しい、おじ様ちんぼで……」

「トロトロの肉壺まんこ、ずっぽりハマられて……ああ……」

「壊れるくらいに……シユホシユホして欲しいんです……」

「おじ様の……熱い、おちんぼ汁で……ああ……ダメまんこ……」

「っぱいにされて……はあ……中出しアケメ、したいのお……」

「びく……びく……」

「お……」



「はあむっ……んぶ……んっんっ……ぶは……じゅる……」

「あちんぽっ……あ……おちんぽっ……んむ……」

「えろ……えろ……じゅずず……んぐ……ああ……」

「は……」

「あむ……はむ……べろ……じゅるるるる……ぶあ……あちんぽ……」

「こんなに、たくさん……あ……す……べろ、れろれろれろ……」

「ははは、恐ろしいくらいに勢いですな。」

「餓えた犬でさえ……」まではなりますまい……んっんっ」

「……ああんっ……あっ……ちんぽイイ……あむ……」

「ああっ、はあっ……んう……じゅるるう……あはあ……」

「ああイイ……んっ……べろ……じゅるる……」

「んっんっ……」

「んっんっ……」

「んっんっ……」

「んっんっ……」

「んっんっ……」



「あーっ……あん…… あ好キー…… おちんぽ…… 大好きれしゅう……」

「おまんこ…… フニョフニョ…… ああも……」

「あっ…… あっ…… あっ…… あはあ……」

「は…… えへ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……これは大した淫乱っぷりだ。れろれろれろ
見ず知らずの男を受け入れてしまうなんて、肉棒中毒にも程があるねえ」

「グハッ……淫乱、淫乱ですう……肉棒中毒の淫乱アスナは……」

「グハッ……おちんちんくわえていないと……生きていけないんですう……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「グハッ……」

「はあ……あん、ソコ……もっと……ああ……そう……

「にりゅにりゅして……おちんぼの先っぽで……っ……

「ああっ、おちんぼ……勃起チンポもっ……っ……ああっ……

「は、い……嬉しい……嬉しいです……**マンマンシロ乳首**……

「おじ様の指でくりくりされて、あん……

「勃起チンポ……えろ……しゃぶって……

「ギ……

「あ……

「あ……

「あ……

「あ……

「あ……

「あ……

「あ……

「あ……

「あ……

「中年ちんぽに囲まれて……どすけべおまんこイカされますっ……

「あ……

REC

1000
0fps

192

「お久しぶりですおじ様。」

「こうして会えて、すごく嬉しいです」

「えへへ……今日はいい、レベリングしちゃいますよお」

18:37:20

映像の中で、二人の少女が微笑んでいた。

A

「久しぶりなものも、ついこの前したばかりじゃないか」

「まったく、君達はどいまでも食欲だねえ……」

男の声。しかも若くない中年男の声。



「おじ様達も、おちんぽびんびんで辛いですよね。」

「遠慮せずに、私のオナホまんこでスッキリして行ってください」

「ふふふ、また病院を抜け出してきてしまったのかい？」

「いけないコだねアスナ君。君はまだリハビリ中だろう」

「だってあっちの身体じゃ、まだセックスしてもらえないんだもん。」

「ふふ…おじ様ちんぽが恋しくて、抜け出してきちゃいました」

「シリカちゃんもダメじゃないか。病院で休んでいないと」

「でも、私は攻略組みですから。」

「レプリングを怠るわけにはいきません。」

「もっともっとしべれを上げて、強くならなにとけなさんです」





「んふ…ね。…はあ…わかる、でしょい…」

「二日もおちんちんもらえてなくて…おまんこでしよ濡れなの…」

「病院で経験値を集めよつとすると、おは」

「看護婦さんに止められちゃつので…んふ…おじさん達が、」

「付き合ってくたさいね…」

「まだ君の体力は回復していないじゃないか。無理をさせるわけにはいかないよ」

「はー」

くはあ…

トロ…

「でも…このちの世界なら、良んですよね…」

「おじ様達もお…おたしを犯したいから…はあ…」

「にに、来てくれたんですよね…」

「こっち見ちゃダメ……」

「こっぴつ……けこつ、恥ずかしいんだから……」

「あつ……ふふ、今ビクッてなった……お兄ちゃん……あたしの手、気持ちイイ？」

「コス♡♡」

「……」

「気持ち良くなっていいよお兄ちゃん……」

「アスナさんのことは残念だけど……」

「でも……ココ、こんなになってるし……我慢しなくて良いよ……」

「んふ……はあ……このまま……」

「出していいよ……はあ、あたしの手で……イっていいよ……」

「ギ」

「はあ……あ……お兄ちゃんの、精液……ん……」

「アス……」

「す、スグ……っ？」

「えへへ……おいしいよ、お兄ちゃん」

「あたしね……嬉しかったの……本当のゴトを知って、お兄ちゃんが帰ってきてくれて……もう我慢しなくて良いんだって……」

「……アスナさんのことは忘れなくてもいいの。」

「それでも……これからは……あたしが側にいて、お兄ちゃんの心を……満たしてあげる……」

「ギ……」





「あ……あは……んう……入ったよ……お兄ちゃん……」

「……あ……」

ハッ
ハッ
ハッ

「あん……ふふ……お兄ちゃんは動かなくて良いよ……」

「あたしが、お兄ちゃんを……はあ……癒して、あげる……」

「ね……どっかな……あたしの中……」

「はあ……ちゃんと……あ、気持ちよくなって……くれてる……？」

グリン

チュプ…



「あ……は……
お兄ちゃん……ごんなに、いっぱい……はあ……あ……
「はあ……はあ……スグ……」

「スグ……ごめん、俺一人で盛り上がっちゃったかも……」
「……そんなことないよ、あたしもすごい感じちゃった……えへへ」

ん……♡♡♡

トビ

チュプ……

グリ♡♡

「あは…おじさんのおちんぽ…あむ、おっききゅぎて…
はあ…あたみのおっぱいでも…包めないよ…」

「直葉ちゃんに『う』してもらうのは久しぶりだからね。」

「NPCも悪くはないけど、直葉ちゃんに『う』してもらうのが『番だね』」

ムニイ

ハハハ

知知

モニユ

ホロホ

「あん、おじちゃん…ゲーム内でのリアルネームは、
えろ、マナー違反でふよお…」

「ああ、ひゅひゅ…おちんぽびくびく…はあ…らみて…」

「おちんぽ汁…リーファのおくちまん…どひゅどひゅしへえっ」

グ

「あ……」

「おや……本当に濡れているね……」

「こんなに透けてたら、パンツをはいている意味がないじゃないか」

「シヨーツに出来た溝を上から下へ、」

「下から上へと指で辿り中年男は唇を歪めた。」

「あん……もう……焦らなすぎて……」

「おじさんちんぽ……早く……」

「キ……キ……」

♡♡

トロツ

胸と同時に成長した臀部を掲げ、左右に振り、リーファが男の欲望を煽る。

「これはたまらんね……おじさんも、もう我慢できないよ……」

「でも、まだ満足してないんだよねっ」

「ん……はあ……ふふ、おじさんはあたしの身体のこと……」

「何でも知ってるんだね……」

「そりゃあ2年の付き合いだからね……お尻を見れば分かるよ」

「そ……は願って言ってよね」

「ははは、すまないね」

「ふ……と顔を膨らませ、すぐに猫なで声に戻る。」

「ね、おじさん……」

「ト
キュ
キュ」

「トロッ」

「リーファが少しだけ腰を下げ、男女共通の穴を差し出す。」

「ああ、分かっていると……」

